

① 身近な哺乳類

• 日本の哺乳類

哺乳類は世界で約 5400 種いるうち、日本には約 170 種が生息しています。その中で日本固有種は 50 種、約 30%を占め、世界でも貴重な動物がいるのです。例えば、オナガザル科なのに尾が短いニホンザル、急斜面の岩場も平気なウシ科の仲間のニホンカモシカなどは、日本でしか見られない動物たちです。街の中でも夏の夜空を舞い、私たちの苦手な蚊や蛾を食べるアブラコウモリは、少し意識すれば誰でも見るができるでしょう。マツやドングリなどの木が生い茂る森では、早朝はニホンリスに、夜には木から木へと森の中を滑空するムササビやモモンガに出会えるかもしれません。しかし、ニホンリスはシャイなのでなかなか姿をみせてくれず、また多くの日本の哺乳類は夜行性で直接見るのは難しいのです。そのため、センサーカメラでの撮影が有効です。カメラを使わない場合は、足跡や食べ跡、糞などのフィールドサインと呼ばれるもので、哺乳類の生息を確認します。まるで、探偵みたいでしょ。（動物の糞や死体にはむやみに触らないでくださいね。）

• タヌキとアライグマの違い

昔話やアニメの主人公、置物のモチーフにもなるタヌキは、街にも生息している動物です。タヌキはウンチで他の仲間と会話をしています。「貯め糞」と呼ばれるウンチの塊があれば、そこにはタヌキがすんでいることでしょう。探偵になったつもりで、動物を探してみるのも楽しみですね。

ところが、日本の哺乳類の中には、外国から持ち込まれて日本の生態系を脅かしている動物もいます。その一種がアライグマです。アライグマは、アニメのキャラクターとなり人気となりました。果実を洗って食べるしぐさが「洗いクマ」として、愛くるしさもありますが、実は気の「荒いクマ」でもあるのです。そのため飼いきれず野山に放してしまった結果、現在大きな問題になっています。街の中にも生息しており、見かけた場合むやみに近づくのは大変危険です。その時は地元の市町村の対策部署はまちまちなので、Web サイトや窓口で確認し、連絡しましょう。それも大切な自然環境を守る行動です。

ただ、このアライグマは在来種のタヌキに似ているため、間違えられることがあります。顔は似ていますが、口ヒゲがはっきりと見え、しっぽが縞々になっていれば、間違いなくアライグマです。

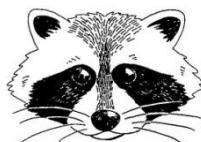
ニホンタヌキ

日本固有種

アライグマ

特定外来生物

顔



目立つヒゲ

尾

縞にならず

尾の先は黒い



縞模様の尾



足跡

犬に似て

4本の指跡

木には登れない



5本指の跡

木に登れる

(イラスト:倉知志舞)

・夜に調査する時のコツ

夜暗い時に観察する場合は、懐中電灯に**赤いセロファン**を貼りつけて使いましょう！赤色の光なら、動物も驚きません。また、私たちが白い光だと眩しくなりすぎて、折角慣れた暗闇が逆に見えなくなってしまうのです。また、声を出すのも、動物を驚かせてしまい逃げてしまいます。注意しましょう。

・未来へ

日本の生き物たちは、太古から私たち人間と暮らしてきました。私たちの衣、食を支えるだけでなく、物語や絵画などのモチーフとして文化の源にもなり、心を癒し豊かにしてくれる貴重な資源でもあります。これからも、この大切な生き物を絶やさないように、モニタリングをしながら見守っていきましょう。今回は生態系ネットワークの指標種として見つけて欲しいホンダキツネを紹介しますが、キツネ以外の哺乳類でも見つけたら、ぜひ、写真を撮影して送ってください。私たちのそばにいる哺乳類に出会える日を楽しみにして。

耳の裏:黒

細長い吻^{ふん}

垂尾の先:白



(相生山緑地, 2012-12, 名古屋市)

ホンドキツネ 食肉目 イヌ科

Vulpes vulpes japonica Gray

「ごんぎつね」のモデル

【形態】

体重:1.9~6.6kg 頭胴長:51.5~70.0cm
尾長:28.5~42.0cm 手足:ほっそりと長い
体毛:赤味をおびた黄褐色
下顎から腹部・尾の先:白

【分布と生態】

本州、九州、四国(四国は少ない)
夜行性で冬眠はしない。
ネズミなどの小動物、ウサギ、鳥や卵、
昆虫、果実などを食べる肉食系の強い
雑食。

【さがすポイント】

交通事故に遭い道路で横たわる。
イヌやタヌキより細長い足形が残る。
足跡は一直線状になる。

【よく似た種】

柴犬よりスマートで吻(ふん)が細長い。
柴犬の尾は巻くが、キツネは垂れ下がる。

【参考資料】

県 GDB②p.A-13

ホンドキツネは、ニホンオオカミ絶滅後、生態ピラミッドの頂点にいます。キツネは100~800haの行動範囲をもち、広い生息空間が必要です。しかし、生息地である森は宅地などに開発され、餌場の草原や畑なども縮小。移動時には車との接触で命の危険にさらされ、東京都では絶滅に近い状態です。でも、まだ今なら愛知県でキツネが安定して生息することは可能です！想像してみてください…信号機の意味が解らないキツネの親子が、エサや水を求め歩いている姿を。キツネが気持ちよく安全に移動できる場所は、私達にとっても良い場所となることでしょう。

ビオトープ

生き物のすむところすべてがビオトープ

ビオトープ (Biotop) とは、「生き物のすむ場所」を意味します。自然の森、川、湿地、池はもちろんのこと、人間の作った水田、畑、街路樹さらには家やビルさえもコウモリやツバメなどが利用するビオトープです。



ビオトープは、ギリシャ語の「生き物:Bios」と「場所:Topos」を合わせたドイツで生まれた合成語です。ビオトープ事業とは、自然環境を保護、保全、復元、創出することです。これには明確な優先順位があり、一番大切なのは今ある自然の保護。新たなビオトープの創出は最後の手段です。近年、維持を考えていない安易な創出や、動植物の移動能力を無視した放流、放逐、移植、播種が新たな環境破壊として大きな問題になっています。誰も自然を破壊しようとは思っていないのですが、生態学の知識が足りないため良かれと思ってした行為が、反対に自然に悪影響を与えてしまう危険性もあるのです。

あなたの住む場所も「生物多様性ホットスポット」

日本に棲む哺乳類の 42%、カエルなど両生類に至っては 76%が日本にしかない固有種で、植物も 1500 種以上が固有種です。なかでも愛知県は、植物の多様性の高い県であり、この地域にしか生育していない固有植物がいくつもあります。ところが、多くの場所で自然を減少させる開発や外来生物の導入を進めたことで、生物多様性に欠ける質の低い場所になってしまいました。そのため、今、あなたが住んでいる日本は、固有生物が多いにも関わらず原生の生態系が 70%破壊された「生物多様性ホットスポット」(＝世界で最優先に守るべき場所)に指定されているのです。

ビオトープという言葉が消える日

私達は生態系の中で、空気、水、そして食う一食われるの食物連鎖を通じて、生き物と繋がっています。従って種の絶滅は、いつか私たち自身の生活にも悪影響が出るのは明らかです。だからこそ、身近な自然に目を向け、地域の自然環境を保護、保全、復元、創出をしていくきっかけとして、ビオトープを理解してほしいものです。そしていつの日か、日本のすべての生き物たちが絶滅危惧の無い普通種となった時、ビオトープという言葉そのものが無くなるのでしょうか。それこそが、大昔から日本人が営んできた自然と共生する暮らしが、また新たに実現された証に違いないのだから。